

## 日本語から見たタイ語

### — タイ語・中国語・日本語三つ巴の楽しさ —

高橋清子

#### 1. 中国語にそっくりなタイ語

大学に入学したとき何かアジアの言語を学んでみたいと思い、当時アジアの言語で唯一選択外国語科目として開講されていた中国語を履修した。まず苦労したのが声調の四つの型の違いを聞き分けることだった。半年経っても違いをはっきり識別することができなかった。一年が過ぎたあたりから徐々に音感が芽生え、二年目にやっと聞き取れるようになった。私は(この亀の歩みのような)中国語学習を通して外国語を耳や口で覚えることの面白さ、外国語の音に馴染んでいくことの楽しさを知った。

それから一、二年してタイ語学習を始めたとき、タイ語は中国語によく似ていると思った。声調があることだけでなく、語形変化がなく、動詞連続体を多用するなど、両語には誰でもすぐに気がつくであろう多くの類似点がある。実際、タイ語は中国語と同じシナ・チベット語族に属すると紹介する言語学関係の書も多い。(タイ語の系統帰属については、シナ・チベット語族に属するという説の他、オーストロネシア語族に近いとする説もある。)両語に共通する特徴は次のように多岐にわたる。

①音韻論の面からは、声調という特徴的な音素を持つ「声調言語」に分類される。

②形態論の面からは、語形が変化しない「孤立語」に分類される。

③統語論の面からは、基本語順が主語、動詞、目的語となる「SVO言語」に分類され、複数の動詞句が接続詞を介さず連続することを許す「動詞連続言語」に分類される。

④ディスコース分析の面からは、主語や目的語という統語上の概念よりも主題という情報構造上の概念のほうが優位に働いて文章が構成されていく「主題言語」に分類される。

その他、文法範疇の値の特定化が必須ではない(そもそも文法範疇としての対立的パラダイムを形成していない)点も共通している。これだけ似ていれば、中国語研究の成果が安易にタイ語研究に敷衍される傾向があるのもうなずける。

#### 2. 発想が似ている日・タイ表現

しかし、タイ語を学習し始めてから(やはり亀の歩みで)二〇年経った今、ようやくタイ語の全体像がおぼろげに見えるようになり、外見は中国語そっくりでも、中身(言語表現から伺える話者の発想や世界観のようなもの)は意外と日本語に似ていると思うことが多くなった。いくつか具体例を挙げよう。

##### 2. 1. 自動詞に添えられた名詞句の役割

中国語には二重非対格構文と呼ばれる構文がある(Chappell 1999)。自動詞が名詞句を従える非典型的な語順の構文で、動詞の後ろの名詞句が表すものは動詞の前の名詞句が表すものの所有物(身体部位や親族など譲渡することのできない所有物)である。所有物に起こった何らかの事態がその所有者に何らかのマイナスの影響を及ぼすことを表す。例えば**他們家跑了媳婦**(彼らの家族は嫁に逃げられた)では、**他們家**(彼らの家族)と**媳婦**(嫁)が所有者・所有物の関係にある。**他們家**(彼らの家族)は所有物であるところの**媳**

婦(嫁)が逃げる(家を出る)という事態の発生によって何らかのマイナスの影響を被ったのである。**我答不出來紅了臉**(私は答えることができず顔が赤くなってしまった)も、**我(私)**を所有者、**臉(顔)**を所有物として、同様に解釈することができる。(英語や日本語の形容詞に相当する意味を表す中国語やタイ語の語は、統語的に動詞と同じふるまいをするので状態動詞 *static verbs* などと呼ばれ、ひとつの独立した品詞を構成しない。したがって**跑(逃げる)**も**紅(赤い)**も同じ自動詞のカテゴリーに含まれる。)

一方タイ語の自動詞が名詞句を従える形式では、不運や災難を被るという意味は生まれない。なぜなら自動詞の前と後ろの名詞句が表す二つのもの間には所有者・所有物の関係がないからである。自動詞の後ろの名詞句は、誰かの所有物といった特定のものを指すのではなく、非特定の一般的なものを指し、自動詞の後ろに添えて話者の主観的な見方や判定のあり方を暗示するいわば副詞のような機能を果たしている(Takahashi, in press)。いくつか典型例を挙げる。

- (1) **tôn nîi ?òk phǎn**  
この木、出る、果実  
この木からは、出る、果実が  
> この木は実がなる
- (2) **kháw bàat cay**  
彼、切り傷を負う、心  
彼は、切り傷を負う、心が  
> 彼は感情を害する
- (3) **yaay kèe tua**  
祖母、老いている、身体  
祖母は、老いている、身体が  
> 祖母は肉体的に老けている
- (4) **man sa?àat taa**  
それ、清潔だ、目  
それは、清潔だ、目で見て  
> それは見た目が清潔だ

(1)の **phǎn** (果実)は **tôn nîi** (この木)の果実を指しているのではなく、どの木にもなる一般的な果実のことを意味している。一般に木からは葉や実などが出るが、この種類の木について言えば実が出る、つまり実がなるということを話者は言いたいのである。

(2)の **cay** (心)は **kháw** (彼)の心を指しているのではなく、人間であれば誰にでもあって情意が生じるところと考えられている一般的な心のことを意味している。一般に人間は身体部位をときに傷つけるが、その彼について言えば心が傷ついた、つまり気分を害していると言いたいのである。(3)の **tua** (身体)は **yaay** (祖母)の身体を指しているのではなく、誰もが持っている一般的な身体のことを意味している。一般に人間は身体も精神も老いていくが、その祖母について言えば身体が老いている、つまり加齢によって身体の機能が衰え老けていると言いたいのである。(4)の **taa** (目)は **man** (それ)

を見ている話者自身の目を指しているのではなく、誰もが持っている視覚器官としての一般的な目のことを意味している。一般に人間は手で触ったり鼻で嗅いだり目で見たりして清潔さを感じることができるが、その言及されているものについて言えば目で見て清潔だ、つまり見た目が清潔だと言いたいのである。

タイ語のこれらの表現は、話者の捉え方や価値判断基準が背後に見え隠れするという意味で、統語形式は異なるものの日本語の「腸が煮えくりかえる」、「頤が落ちる」、「口が達者だ」といった表現に似ている。ここで言及されている腸(はらわた、内臓)、頤(おとがい、下顎)、口は、人間一般の腸、頤、口を意味している。誰もが怒ると熱く感じる腸(体内)、誰もが食物を噛んで味わうときに使う頤、誰もがお喋りのために使う口というものを取り上げて、つまりそうした我々が日常の経験を通して共通に理解しているものを参照物とすることによって、言及する事象の特徴づけをしているわけである。

日・タイのこれらの表現は、ある特徴的な参照物を引き合いに出すという点が似ているが、お互い文化が違うのだから参照物は同じものとは限らず、比喩の仕方も異なる場合がある。「腸が煮えくりかえる」に似たタイ語の表現はない。**dùat núa rón cay**(沸騰する、肉、熱い、心)という表現はあるが、その意味は憤りを感じるのではなく、困苦にあえぐことである。腸に言及する表現としては(**man sây**>) **màn sây**(むずむずする、腸)がある。体内でむず痒さを感じ吐き気を催すほどの不快感を表す。「頤が落ちる」もタイ語には似た表現がない。美味しいものを食べたり飲んだりしてそれが気に入れば、固形食なら **tùuk pàak**(適合する、口; 口に合う)と言ひ、液体食なら **tùuk khəw**(適合する、喉; 喉に合う)と言う。タイ語で「落ちる」と表現されるのは、**tòk cay**(落ちる、心; 驚く)のように人間の心もあるが、植物の花・実や動物の卵・子が多い。**tòk ruaj**(落ちる、稲穂)、**tòk khrua**(落ちる、バナナの花序)、**tòk càn**(落ちる、ヤシの花芽)、**tòk fəŋ**(落ちる、卵)、**tòk lúuk**(落ちる、獣の子)など、動植物が一般に経験する開花や産卵・出産(垂れ下がるように花をつけることや生まれ落ちること)を意味する。「口が達者だ」は、タイ語でも同じ発想で、**thanàt pàak**(長けている、口; 喋りが流暢だ)と言う。

なお、弁が立つことを意味する「口が達者だ」は非典型的な自動詞の語順で **thanàt pàak**(長けている、口)と言うが、話術に長けた狡賢い性格を意味する「口がうまい」のほうは典型的な自動詞の語順で **pàak wǎan**(口、甘い)と言う。口説き上手な人やお世辞上手な人について **kháw pàak wǎan**(彼、口、甘い; 彼は口が甘い)などと言うが、この場合の **pàak**(口)は、主題となっている **kháw**(彼)を構成する構成要素としての口を意味している。言い換えれば、この表現の **kháw**(彼)と **pàak**(口)は全体・部分の関係にある。特に顕著な部分について詳しく述べることで全体の特徴づけをしている。それは、**cháaŋ ruaj yaaw**(象、象の鼻、長い; 象は鼻が長い)の **cháaŋ**(象)と **ruaj**(象の鼻)の関係と同じである。

## 2. 2. 可能表現の意味変化の方向性

中国語研究の成果を安易にタイ語研究に敷衍する傾向があると先に述べたが、そのひとつの例が、中国語の動詞得の分析とタイ語の動詞 **dây** の分析の間に見られる関係である。得と **dây** は同源語かどうかよくわかっていないが、両語の知識を持っている言語学者は概

ね躊躇することなくタイ語の **dây** を中国語の **得** に重ね合わせて理解する。**得** も **dây** も英語の **get** や **obtain** のように本来的に「ある人があるモノを得る」ことを意味する動詞であると多くの人が思い込んでいる。ラオス語の **dây** について研究した Enfield 2003 は他の研究者とは異なり、**dây** が表す事象の非意志性や瞬間性を考慮して **dây** に **come to have** というきめ細やかな英語訳を与えているが、所有者となる人間の存在を前提にしているという点は他の研究者と変わらない。

私はタイ語の **dây** はかつては出現物を表す名詞句を後ろに従え「何かが出現する」ことを表す一項動詞であったのではないかと疑っている。もし中国語の **得** がもともと「ある人が何かを得る(獲得し所有する)」ことを意味する二項動詞であったとすれば、**dây** と **得** は同源語ではないと思う。古い時代のタイ語の石碑文には「**dây**、数量名詞句」(ある数量が生じる、ある数量に達する)という形が多数あり、「**dây**、モノ名詞句、**kèε** (与格マーカー)、人間名詞句」(あるモノがある人に生じる>そのモノがその人のモノになる)という形も少なからず見られる(高橋2005)。これらのことから、**dây** はもともと **kèet** (発生する) などと同類の(出現物を表す名詞句を後ろに従えるという非典型的な語順で)出現事象を表す動詞であったらうと私は考えているが、はっきりしたことはわからない。

**dây** は今でも典型的な他動詞的性格を持たない。確かに **dây** がとる統語形式の多くは他動詞の統語形式と同じように人間を表す名詞句が **dây** に先行し、手に入れたい価値あるモノを表す名詞句が **dây** に後続する。**chán dâi nèn** (私、**dây**、お金) など。しかし **yàaŋ cəŋ cay** (故意に) や **phayaayaam** (努力する) といった動作主の意志を表す語句と **dây** は共起できないことからわかるように、**dây** は動作主を表す名詞句を項にとる動詞ではない。**dây** の前に置かれた人間を表す名詞句は動作主ではなく(自然発生的な出現事象を被る)経験者を表していると見るべきである。出現物の到来を受け、結果的にその出現物を手に入れることになる人間が主題とされているのである。**chán dâi nèn** (私、**dây**、お金) は「私にはお金が出現する>お金が自分のところに出現しそのお金が手に入る」ということを意味している。

中国語の **得** もタイ語の **dây** も、現在は実質的意味(動詞としての意味)の他、複数の機能的意味(助辞などの機能語としての意味)を持つ。いずれも「可能」の意味を表すことができる。中国語では、古い時代には **終身改口不得** (終生発言を撤回できない) (Shi 2002: 64)、**一人擊得** (一人が(太鼓を)打てる) (Sun 1996: 118) といった言い方があり、現代では **真得一起跟我反臉** (きっと皆私に腹を立てる) (Sun 1996: 130) や **庫房重地不得入内** (倉庫要地は侵入ならない) (Sun 1996: 132)、あるいは可能補語と呼ばれる **听得懂** (聴いて分かる) のような表現がある。タイ語では、**pay dâi** (行く、**dây**; 行ける) や **lên piano dâi** (弾く、ピアノ、**dây**; ピアノが弾ける) など、**dây** が動詞句の後ろに添えられ、状況可能、受容可能、能力可能、許可などを含む広い意味での状況可能一般を表す(どういう意味での可能であるのかという解釈は語用論的推論による)。

英語の **may**、**can** や中国語の **得** は、もともと能力可能(動作主可能)を表していたのが状況可能も表すようになっていったと考えられている。可能を表す形式一般の意味変化の方向性はそうした「能力可能から状況可能へ」という方向性であろうという説が現在広く受け入れられている (Bybee 1988, Bybee et al. 1994, Traugott & Dasher 2002 など)。しかし、

一三世紀末から現代までのタイ語の石碑文資料を調査したところ、タイ語の **dây** を使った可能表現の意味変化は、通説の「能力可能から状況可能へ」という方向とは逆の「状況可能から能力可能へ」という方向であることがわかった(高橋・新里2005)。この意味変化の方向性は、実は、日本語の **なるやできる** を使った可能表現(帰還がなる、水泳ができる、など)の意味変化の方向性と同じである。**dây**、**なる**、(いでく>でく>) **できる** はもともと自然発生的な物事の出現を表す出現動詞だったが、「～ならぬ、～できぬ、～否定辞 **dây**」という形で「状況が許さず、当該事態が出現しない」という状況不可能の意味を表すようになり、さらに肯定形で状況可能を表す形式となった。**なるとできる** のほうは能力可能も表すようになった。**dây** のほうはその語義として明示的に能力可能を表すことはないが、動作主の能力が問題となる文脈では能力可能と解釈される。

日本語もタイ語も、動作主の動向を中心に出来事を描写するのではなく、事象に関わるものすべてを含む出来事全体の移り変わりを描写する傾向が強いように思われる。日本語とタイ語に共通するこうした性格が、**dây**、**なる**、**できる** に見られる「状況可能から能力可能へ」という意味変化の方向性を決定付けたのではないだろうか。

### 2. 3. 移動事象表現の定性

定性 **definiteness** を特定の文法形式でマークすることが必須ではない言語では、名詞句では類別詞の使用が事物の特定化(個別化)に役立ち、動詞句ではアスペクト形式の使用が事象の特定化(限界化)に役立つことがよく知られている。タイ語はまさにそのとおりの言語である。しかし事物や事象を特定化する方法はまだ他にもあるように思う。ここでは特に事象を特定化する方法について考察したい。

タイ語では、事象の定性を高めるために、時間的様態(相)を特定化するという方法だけではなく、事象に現実世界の因果関係や自然の節理を反映させるような「具体性」あるいは「現実性」を持たせるという方法もよく取られる。例として移動事象表現を考えてみよう。

タイ語では **khùat lɔɔy ?òk maa càak thâm** (瓶は洞窟から水に浮かんで出てくる)とは言えても **khùat ?òk maa càak thâm** (瓶は洞窟から出てくる)とは言いづらい。一方で、**khùat** (瓶)ではなく **kháw** (彼)であれば **kháw lɔɔy ?òk maa càak thâm** (彼は洞窟から水に浮かんで出てくる)とも **kháw ?òk maa càak thâm** (彼は洞窟から出てくる)とも言える。こうした制約に対して、**?òk** (出る)などのタイ語の移動動詞は本来的に意志的行為(制御移動)を表す動詞、すなわち[+意志性]という意味素性を持つ動詞であるから、**khùat** (瓶)のような意志性や制御力(支配力)を持たないものの移動を単独で表すことができないのだ、と理由づけされることがある(Kessakul 2005)。しかし **?òk** (出る)のような移動の方向を特定する方向動詞の意味素性として[±意志性]を設定するのは果たして正しいタイ語分析のあり方だろうか。

例えば、タイ語では「東」を **thít tawan ?òk** (方角、太陽、出る; 太陽が出る方角)という複合名詞で表現する。太陽は意志を持たないが毎日決まって東の地平線から出てくるので東の方角をこう呼ぶようになったのであろう。**dèet ?òk** (強い日差し、出る; 強い日差しが出る)や **lúat ?òk** (血、出る; 血が出る)なども、移動物は意志的に動いているわけではないが、自然な表現である。

**khùat ?òk maa càak thâm** (瓶は洞窟から出てくる) という言い方がおかしいのは、現実の移動事象として想起し得るだけの具体性に欠けているから、という理由づけだけで十分であると私は思う。瓶が洞窟から出てくるという事象を現実世界の中で実際に起こる特定の事象として表現するためには、瓶がなぜ動くのかという背景を明らかにして、その事象の具体性を高める必要があるということだ。「彼は洞窟から出てくる」と言えば、歩いて出てくる、這って出てくる、泳いで出てくる、乗り物に乗って出てくる、等々、われわれの日常の経験(人間の社会生活)からすぐに具体的な移動事象を思い浮かべることができる。しかし「瓶は洞窟から出てくる」と言われても、瓶の具体的な移動のイメージは浮かびにくい。現実性が薄く、いわば「不定」の事象である。瓶が水に浮かんで出てくるのか、誰かがその瓶を投げた結果出てくるのか、等々、ある程度明示的に移動の様態や原因について言及し、具体性を高めてあげなければならない。そうすれば「定」の事象となり、自然な発話として成り立つ。

中国語でも**瓶子从山洞里面流出来了**(瓶は洞窟の中から流れて出てきた)とは言いが、**瓶子从山洞里面出来了**(瓶は洞窟の中から出てきた)とは言わないという。中国語では、瓶などの自力では動かないものの移動を表すときには、たとえ完了相を表す**了**を添えて時間の様態を特定化しても、移動の様態(流れるなど)に言及して事象の具体性を高めないと不自然に聞こえるようだ。一方タイ語では、**khùat ?òk maa càak thâm léew**(瓶は洞窟から出てきた)のように完了相を表す**léew**があれば、様態動詞がなくても言いやすくなる。同様に日本語でも「瓶は洞窟から出てくる」という表現は瓶が人間のように自力で動いて出てくるようで(そうとしか推論を働かせることができず)どうも落ち着かない表現だが、「瓶は洞窟から出てきた」のように完了相であれば様態を表す動詞がなくても自然に聞こえる。

「出てくる」という非完了相の場合に、日本語でも「彼は洞窟から出てくる」ならおかしくなく「瓶は洞窟から出てくる」だとおかしいこと理由は、先にタイ語について考察した理由と同じであろう。「出てくる」という表現は時間的に特定化されていないので現実性にやや欠けるが、人間の「彼」が移動物であるという前提があれば、どのような移動が可能かを推論し具体的にイメージすることが容易となり、その結果現実性が増す。

「瓶」が移動物ではそう簡単にはいかない。もう少し具体的な付帯状況を付け加えなければならない。

日本語では、どのような様態で移動したかが問題とされる文脈でなければ「彼らは洞窟から歩いて出てきた」と言うより「彼らは洞窟から出てきた」と言うほうが自然だろう。しかし中国語では、移動物が人間であっても、移動の様態を特定する動詞と方向を特定する動詞の両者を組み合わせた形でその移動が表現されることが多いという。「様態動詞+方向動詞」という移動表現形式の固定化(構文化)が進んでいるのかもしれない。タイ語では果たしてどうだろう。移動物が一般に自力で動かないと考えられているもの場合は、前述のとおり移動事象の具体性を増すために様態を表す動詞が使われる傾向があるが、移動物が一般に自力で動くと考えられているもの場合は、様態動詞はあってもなくてもどちらでもいい(つまり完全にオプショナルである)と思う。もしタイ語話者に**kháw ?òk maa càak thâm**(彼は洞窟から出てくる)と**kháw dæm ?òk maa càak thâm**(彼は洞窟から歩いて出てくる)のどちらが自然な表現だと感じるか、どちらをよく使うか、

と問うたなら、どちらも自然な表現だ、どちらもよく使う、とほとんどの人が答えるに違いない。具体性を増す必要があるかどうか、状況や文脈を考慮して判断し、使い分けしているのだろう。

### 3. タイ語文法の体系的記述に向けて

これはタイ語研究だけではなく非印欧語研究一般に言えることであるのかもしれないが、これまでのタイ語研究はその多くが印欧語の研究者の視点で貫かれていた。印欧語を基盤に成立したいわゆる西洋文法の枠組みがタイ語の分析においても(その適用の妥当性が十分に検討されることなく)所与のツールとして使われてきた嫌いがある。しかし私は自分の母語である日本語も西洋文法の枠組みに馴染まないところが多々あると感じている。西洋文法概念を闇雲に用いて分析することを避け、非印欧語話者(日本語話者)としての視点を活かして、これからもタイ語研究に臨みたいと思っている。とはいえ、西洋文法の枠組みを採用せずしていかに言語体系を記述し得るのか。未だに明確な答えを見出すことができず、試行錯誤しながら断片的な記述試案を続けている。

タイ語の言語事実に即した体系的・包括的な文法記述に向け(今後も亀の歩みで)解決していきたいと思っている問題の中で、前節で取り上げた言語事象にも関連する基本的な問題を以下にいくつか挙げて本稿を終えることにしたい。

(一) どのような「品詞」を立てるべきか(タイ語文法として意味のある語の範疇化はどうあるべきか)。印欧語や日本語の語は各語類特有の語形変化があるので動詞、名詞、形容詞などの品詞分類が容易だが、中国語やタイ語の語は形が変わらないので他の語との共起関係といった統語的ふるまいだけに頼って分類しなければならない。中国語の場合は複合語化や文法化が進んでいるため、タイ語よりも語類の分類は容易かもしれない。タイ語にはさまざまな統語的位置に立つことのできる語が多い。実質語としても機能語としても使える用途の広い語が今なお数多くある。そうした語の多義性・多機能性を反映した分類はどうあるべきかを考えなければならない。

(二) どのような「文型」を認めるべきか(果たして「文」という単位をどう定義するのか)。タイ語の動詞とその項名詞句の関係は、印欧語のSVO(動作主の主語、他動詞、受動者の目的語)のように統語的に固定され意味的にも役割関係がはっきりしているいわば必須項のようなものではない。日本語のように項名詞句に格マーカーがつくわけでもない。もちろん動詞と項名詞句との間に何らかの一致現象が見られるわけでもない。そのため「主語」「目的語」の定義は、統語的にも意味的にもあやふやなものにならざるを得ない。すると当然のことながら文型を規定することが難しい(句読点がないので文と節の区別も難しい)。中国語は、動詞連続体も動詞の現れ方や項名詞句の取り方などについて形式化が進んでいるように、統語的にも意味的にも文型(構文)の固定化の度合いがタイ語より高いようだ。

(三) 文と言う単位が規定できるとして、文にどの程度の「階層レベル」を設定すべきか(構成素の埋め込み関係をどの程度認める必要があるのか)。例えば、タイ語の動詞連続体は、**pay thǔŋ**(行く+至る)のように因果関係を持つ連続事象をひとまとまりの事象として表したり、**deən pay**(歩く+行く)のようにあるひとつの事象を異なる角度から多次的に描写したりする形式だが、統語的にその構成素の「主・従」を規定すること

が果たして可能か(それは文法体系として意味のある規定となり得るのか)。

(四) 動詞がとり得る項名詞句が明示されていないときに、そうした項名詞句が「省略」されていると考えるべきか。文法範疇概念が特定の言語形式によって明示されていないときに、そうした言語形式が「省略」されていると考えるべきか。…云々…(項名詞句を明示するかしらないか、文法範疇概念を特定するかしらないか、ということが随意であるならば、省略とは言えないはずだ)。

<参考文献>

- Bybee, Joan L. 1988. Semantic Substance vs. Contrast in the Development of Grammatical Meaning. BLS14, 247-264.
- Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca. 1994. The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World. Chicago: The University of Chicago Press.
- Chappell, Hilary. 1999. The Double Unaccusative Construction in Sinitic Languages. Payne, Doris L. and Immanuel Barshi (eds.) External Possession, 195-228. Amsterdam: John Benjamins.
- Enfield, N. J. 2003. Linguistic Epidemiology: Semantics and Grammar of Language Contact in Mainland Southeast Asia. London: Routledge Curzon.
- Kessakul, Ruetaivan. 2005. The Semantic Structure of Motion Expressions in Thai. Ph.D. dissertation, The University of Tokyo.
- Shi, Yuzhi. 2002. The Establishment of Modern Chinese Grammar: The Formation of the Resultative Construction and its Effects. Amsterdam: John Benjamins.
- Sun, Chaofen. 1996. Word-Order Change and Grammaticalization in the History of Chinese. Stanford: Stanford University Press.
- Takahashi, Kiyoko. in press. Post-Verbal Noun for a Part in Thai. Papers from the 14<sup>th</sup> Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society 2004.
- 高橋清子. 2005. 「タイ語の石碑文に見られる **dây** の用法」『神田外語大学紀要』17, 295-353.
- 高橋清子・新里瑠美子. 2005. 「日本語とタイ語の出現動詞の文法化」『日本認知言語学会論文集』5, 197-206.
- Traugott, Elizabeth Closs and Richard B. Dasher. 2002. Regularity in Semantic Change. Cambridge: Cambridge University Press.

(たかはし・きよこ 神田外語大学専任講師)